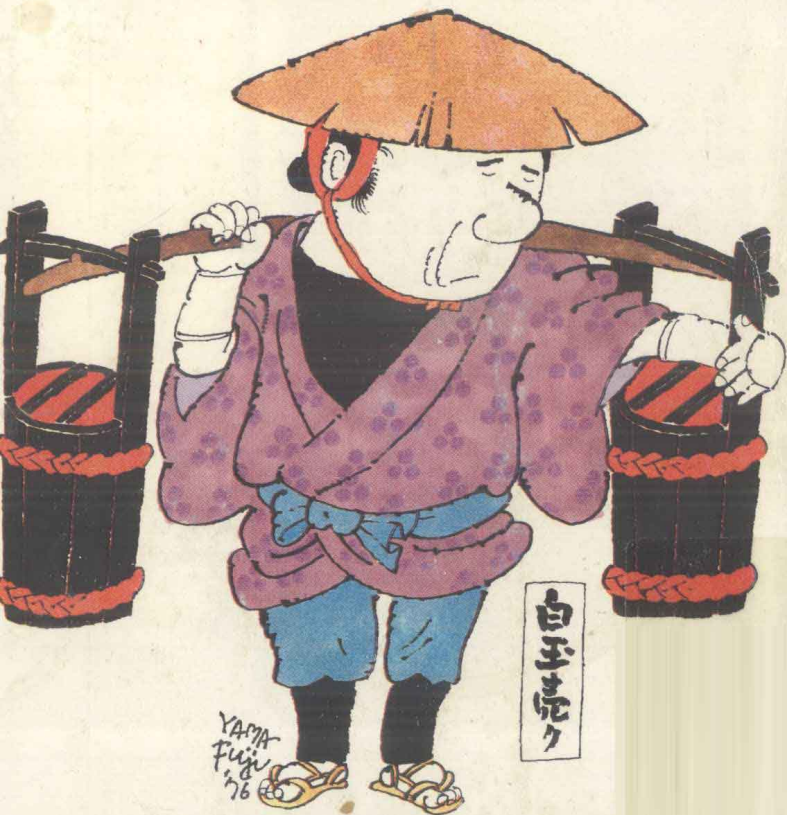


落語文庫

梅の巻





落語文庫

梅の巻

昭和51年3月1日第1刷発行

昭和51年3月5日第2刷発行

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21

郵便番号 112 振替 東京 3930

電話 東京 (03) 945-1111

編集 講談社出版研究所

印刷 株式会社 東京印書館

製本 株式会社 国宝社

Printed in Japan ©KODANSHA 1976

落丁・乱丁本はおとりかえいたします。

定価はカバーに表示してあります。

落語文庫

梅の巻



—

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

目次

子ほめ	かつぎや	夏どろ	堀の内	狂歌のもち	初雪	田能久	親売り	士族の商法
-----	------	-----	-----	-------	----	-----	-----	-------

二五	二九	二三	五	五	五	四	三	七
----	----	----	---	---	---	---	---	---

カバール山藤草二

表紙・とびら・マークII集合
den

梅の巻

子ぼめ



つげやきほ
付焼刃ははげやすいと申しますが、どうも何事も自分の心からしないといけないようで、お世辞なんというものは、ともすると失敗になりやすいものでございます。

隠居「どうしたい、きょうは仕事は休みかい」

熊「実はなんでございます。仕事が半ちくになりましたので、家にいてもつまらねえからお宅にうかがったようなわけで……今、友達に聞いたんですが、なんだってねえ、お宅へこもかぶりが一本着いてるんだって、俺は酒ときたひにやあ目のねえ男なんですが、それでも自分で買うてえのはあまり心持ちがよくねえんで、おごつてもらうのが大好きな性分なんです、一杯飲ましてもれえやしょうか」

隠「おごつてあげるよ、おごつてあげないこともないけれども、なんだなおまえさんぐらい不器用な人はないね、職人なんてえものはなにか芸をやるよ」

熊「なにかやるったってべつだん芸なんてことはあんまり勉強しねえんだから……」

隠「宅うちではそれでいいけれども、よそへ行ったひにゃあお世辞の一つもいえなくちゃあおごつてくれないな」

熊「あなるほど、お世辞なんてことはあんまりやったことはねえんですが、いってえどんなことをいうんで」

隠「教えるというわけにゃあいかなしいけれども、まあなんだ、ちょっと人様に会ったらていねいに言葉ことばをかけるんだな。こんちは、いいお天気でこ



ざいます。しばらくお見えになりませんでした。どちらの方へお出でになりました。先様でもって商用で海岸の方へとおっしゃったら、どうりで潮風にお吹かれになったとみえてたいそうお顔の色が黒くなりました、しかしあなた様などは元来がお色がお白いから故郷の水でお洗になればじきに元どおりになりましょう、ご安心なさい。そういうふうに一生涯懸命になってお出でなればお店の方も大繁盛、したがってだんなの信用も厚くなる、おめでたいことでございます。こういうんだ」

熊「あなるほど、それがお世辞というのか、そういえばなんだね、一杯買うね」

隠「それで買わなかったら奥の手を出して年齢を聞く、失礼なことをうかがうようでごんすが、あなたのお年はおいくつで、先様で四十五だとおっしゃったら、四十五にしてはたいそうお若い、どう見ても厄そこそこでございますとこういう」

熊「あなるほど、厄てえのはあまり聞いたことがねえが、なんのやくで」

隠「四十二のことを厄というんだ」

熊「なるほど、四十二が厄か」

隠「そういえばたい一杯買うな、人情でえものでね、一つでも年齢を若くいわれれば一杯買いたくなる」

熊「そうかね、そんなことくれえなら俺だっていえるよ、むこうから人が来たらなんでしょう、

聞いてみれあいいでしよう、こんちはとくらあ、いいお天気でござえますと、しばらくお見えになりませんでした、どちらの方へ行っておいでになりやしたと、むこうの方で商売用で海岸地方へといったら、こちらが、どうりで潮風に吹かれたとみえて、たいそう面が真っ黒だ」

隠「面なんていう奴があるかい、お顔の色が黒くなったと、ていねいにいわなくっちゃあいけない」

熊「なるほど」

隠「一杯買ってもらうんだからていねいにいわなくっちゃあいけないよ」

熊「お顔のお色が黒くなつてと、あなたなんぞ元が黒いから」

隠「おいおい、元が白いんだ」

熊「元が白いから故郷の水で洗えばじき白くなるから安心しろい、けだものめ」

隠「そんなことをいったらけんかになるよ、ご安心なさいとていねいにいうんだ」

熊「それで一杯買うね、いよいよ買わなかったら奥の手を出して、年齢を聞けばいいんだろう、失礼なことをうかがうようでござえますが、あなたのお年はおいくつで、むこうでもって四十五といったら、四十五にしてはてえそうお若いと、どう見ても百そこそこだよ」

隠「おいおいばかなことをいっちゃあいけない、厄そこそこだよ」

熊「ああそうか、厄そこそこだ、これで一杯買うね」

隠「買うよ」

熊「買わなかったら、隠居さん立て替えるかえ」

隠「ばかをいっちゃあいけない、まあまあやってみなさい」

熊「なるほど、これで一杯買わせることを覚えた、だけど隠居さん、それは巧くいかねえね」

隠「なぜ」

熊「なぜって往来の中だからうまく四十五の人が来りゃあいけど、五十の人が来たらなんというんだえ」

隠「五十だとおっしゃったら、そうさな、四十五ぐらいに見えます、とそういつときな」

熊「なるほど六十だといったら」

隠「五十五六」

熊「七十だといったら」

隠「六十五六さ」

熊「八十だといったら」

隠「七十五六だよ」

熊「九十だといったら」

隠「その順でいきなよ」

熊「順でいきなといってその順がわからねえから聞いてるんじゃあねえか、間抜けめ、なにを
いってやあがるんだ、今まで教えておいてあとを教えねえなんてこすいことがあるもんか、教え
ねえなら教えねえといってみろ、風の吹く日にてめえの家に火を放けるから」

隠「あぶないやつだな、九十だとおっしゃったら八十五六というんだ」

熊「なるほど、百だといったら」

隠「そう生きるかたはめったにないけれども、あつたら九十五六といいな」

熊「二百といったら」

隠「そんな人はないよ」

熊「なるほどそうか……それからもう一つ聞きてえんだがね、俺が隣の金太の野郎にね、子供
ができたんだ、それで長屋中がそろって、義理をやるんだとかなんとかいって、晦日前の苦しい
ところを二分ふんだくられちゃったんだ、血の出るような銭をよ、だけでも町内の交際でいやだ
ともいっていらねえからやったんだ、それで俺もしゃくだから飲みに行こうと思うんだけど、
なにしろそんなところへ行行って口をきいたこともねえから、まだ行かずにいたんで、今ほめ言葉
てえものを初めて習ったが、やっぱり赤ん坊をほめるときにも、しばらくお見えになりませんと
いうんですかえ」

隠「そんなほめかたはないよ、わたしは金太さんのところの子供は見ないけれどもたいい紋

切型きりがたが定きまつてゐるよ、たいそう良いお子さんでございます、おじいさんに似ておいでになってご長命ながいことの相さうがおりなされる、梅うめ檀だんは双ふた葉はより香かほしく蛇じやは寸すんにして人ひとを呑のむ、どうかこういうお子さんにあやかりとうございます。とそいうやあ自分の子をほめられて悪い氣きのするものはない、きつと一杯飲のませるよ」

熊「そうですかえ、ほんとうに一杯飲のませてくれますか」

隠「飲のませるよ」

熊「じゃあさよなら」

隠「まあお待ち、家うちで一杯つけたから飲のんでいきなよ」

熊「いやよしやしょう、今教しえられたことを忘わすれるといけねえ、さよなら……」

熊「なんだべらぼうめ、今の熊さんはきのうまでの熊さんと熊さんが違ちがつてらあ、しばらくお見えになりませんでしたので、酒さけを一杯買かひせる術あつを覚おぼえてしまったんだから……覚おぼえたのはいいが、なんだだれも人が通とほらねえな、弱よわつたな、あつ向むかこうから来た来た、たいそう色いろが真まっ黒くろな野郎やろうだな、同じほめるにもほめられるほうで張り合あひがあるだろう、もしもしそこへ行く人、こっちへ来きさつせえ、ははあ来きやあがつたな……こんちは」

○「こんちは」

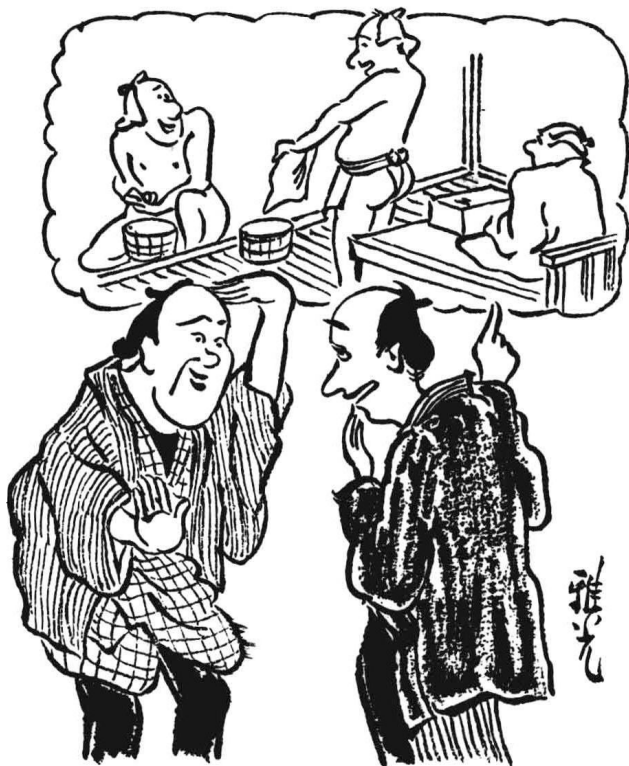
熊「しばらくお見えになりませんでしたか……」

○「はあ失礼ですがあなたはだれでしたっけ」

熊「ははあたいそうお色が真っ黒け」

○「大きなお世話だ、さよなら」

熊「いけねえや、まるつきり知らねえ人では困るな、知ってる人は来ねえかなあ……やあ来た来た、伊勢屋の番頭が……」



雅光

おーい番頭さん、こんにちは」

番「いやどうした、色男」

熊「占めたっ、畜生……ええしばらくお見えになりませんでしたな」

番「なにをいってる昨夜髪床で会ったろう」

熊「あつ困ったな、髪床からこっちしばらくお目にかかりませんでしたね」

番「けさお湯屋で会った」

熊「よく会うな……こねえだ中しばらくお目にかかりませんでした」

番「ああこのあいだ中はちよつと商売用で海岸の方へ……」

熊「ありがてえ、畜生、きやあがったな、そうこなくっちゃあいけねえ」

番「いやだね、どうしたんだい」

熊「ところで潮風に吹かれたとみえててえそうお顔の色が黒くなりました……ああくたびれた」

番「なんだい、そんなに黒くなったかい」

熊「ああどっちが後ろだか前だかわからねえ……そういうふうに一生涯命になっておいでにな

ればお店もご繁盛と、したがってだんなの信用も厚くなる、つけあがって帳面づらをごまかすな」

番「いやだなあ、人聞きの悪いことをいっては困るよ」

熊「どうだ、一杯買うだろう」